

## 都内に住む現役世代の意識と高齢者の生活実態を調査——東京都

東京都は先ごろ、都内に住む現役世代と65歳以上の高齢者を対象に、介護等に関する調査結果を公表した。それによると、20～64歳までの3人のうち2人が65歳以降の高齢期を都内で過ごすことを希望。訪問介護へのニーズが高く、介護ロボットには肯定感を抱く人が多い。一方、高齢者は、介護が必要にならないというちは約7割、介護を要することになっても約5割の人が、今の住居に住み続けることを願っている。以下は両調査の概要。

### 高齢者施策に関する都民意識調査

調査は、将来迎える高齢期の生活像や親の介護等に関する現役世代の意識を把握し、今後の高齢者施策展開のための基礎資料を得ることが目的。2016年1月、20歳以上65歳未満の都民6,000人を対象に実施した。

#### 3人に2人が「高齢期を東京で過ごしたい」

高齢期に過ごしたい場所について聞いたところ、「都内の現在お住まいのエリア」(60.2%)が最も高く、次いで「東京・近隣3県以外の日本国内」(9.9%)、「都内の現在お住まい以外のエリア」(6.3%)の順。「都内の現在お住まいのエリア」と「都内の現在お住まい以外のエリア」を合わせた「都内」を希望する人が約67%と3分の2を占め、「東京以外」は約15%だった。「都内」希望者を年代別に見ると、20歳代では約半数だが、60歳代では約85%となるなど、年代が上がるにつれて高くなる傾向にある。

過ごしたい場所に「現在お住まいのエリア」「都内の現在お住まい以外のエリア」「近隣3県」「東京・近隣3県以外の日本国内」「海外」を選択した人に、その理由(あてはまるものを全て選択)を聞いたところ、「住み慣れた(生まれ育った)地域に暮らしたいから」(66.0%)が最も高く、次いで「日常生活の利便性がよいから」(57.5%)、「家族・親戚・友人等親しい人がいるから」(48.7%)、「公共交通の利便性がよいから」(47.5%)、「医療体制が充実しているから」(24.6%)となった。

同様に、移住するうえでの不安や懸念点(同)を尋ねると、「日常生活の利便性」(44.3%)が最も高く、次いで「医療・福祉」(41.0%)、「公共交通の利便性」(33.9%)、「移住先の人間関係」(25.5%)、「仕事の継続または就労」(23.7%)となっている。

### 入居施設は住まいから1時間以内の場所を希望

調査は、将来の介護に対するニーズについても尋ねている。将来、自宅で受けたい介護(同)については、「(ヘルパーに来てもらう等の)訪問介護サービス」を希望する人が65.4%と一番高く、次いで「配偶者から介護を受ける」(30.7%)、「子供から介護を受ける」(18.0%)、「自宅で介護は受けたくない」(17.8%)となっている。

自身に介護が必要になり、施設に入所することになった際に入所してもよいと思う、住まいから施設までの距離は、「公共交通機関等を利用して1時間以内」(47.5%)が最多で、「徒歩圏内」(28.0%)が続く。また、現在、同居している祖父母・父母・配偶者に介護が必要になり、施設に入所することになった場合の「入所してもよい」と思う、住まいから施設までの距離についても、一番は「公共交通機関等を利用して1時間以内」(50.1%)で、次に「徒歩圏内」(27.9%)が高い。どちらも、徒歩圏内も含め、「1時間以内に行ける場所を希望」している人が7割強を占める結果になっている。

### 移乗介助、移動支援の利用に7割前後が肯定的

介護の現場は人材不足が深刻化しており、介護労働者の処遇改善等による人材の確保・定着に加えて、介護ロボットの導入による環境改善や負担軽減の検討も進められている。自分自身や身近な家族に介護が必要になった際、図表にあるような介護ロボットを利用したいか否かを聞いたところ、「移乗介助用機器」は69.2%、「移動支援用機器」は72.7%、「見守り用機器」は77.7%、「コミュニケーションロボット」は45.7%の人が利用を希望した。

他方、利用したくないと回答した人にその理由を聞くと、「移乗介助用機器」(利用したくない15.0%)は、「価格が高そうだから」(56.3%)、「安全性に心配が

あるから」(31.9%)、「機器に介護されるのは嫌だから(家族が嫌がると思うから)」(23.4%)が上位で、「移動支援用機器」(同12.4%)は「安全性に心配があるから」(51.6%)、「価格が高そうだから」(38.8%)、「機器の扱いが難しそうであるから」(17.4%)の回答が多かった。「見守り用機器」(同10.4%)では「プライバシーが確保されるのかが心配だから」(63.8%)が突出したほか、「価格が高そうだから」(16.2%)や「機器に介護されるのは嫌だから(家族が嫌がると思うから)」(14.4%)も一定程度見られ、利用に最も抵抗感が強かった「コミュニケーションロボット」(同32.8%)については、「人で十分対応できると思うから」(46.0%)が最も高く、「機器に介護されるのは嫌だから(家族が嫌がると思うから)」(36.7%)、「価格が高そうだから」(15.7%)の回答も少なくなかった。

### 平成27年度東京都福祉保健基礎調査

調査は、高齢者の生活実態を明らかにし、今後の施策推進の基礎資料を得ることが目的。2015年10月、65歳以上の在宅高齢者6,000人を対象に実施した。

#### 要介護・要支援認定の高齢者を最も長く介護している「配偶者」

それによると、要介護・要支援認定を受けている高齢者を介護している人(複数回答)は、「子供」の割合が最も高く47.8%で、次が「配偶者」(38.2%)となっている。最も長い時間介護している人は、「配偶者」の割合が高く34.0%。次いで「子供」(28.1%)、「ホームヘルパーなどの介護職員」(25.3%)だった。

一方、介護が必要となった時に最も希望する在宅介護のあり方は、「介護サービスを利用した介護」(59.4%)が「家族や親族による介護」(36.0%)を上回っている。また、家族を介護する際(または介護することになった場合)、アシストスーツ(体に装着して人を持ち上げるときの腰などへの負担を軽減するロボット機器)を利用するか否かの意向を尋ねたところ、「利用したい」割合は25.0%だった。

#### 介護が必要になっても半数が「現在の住宅に住み続けたい」

介護が必要にならないうちの高齢期の住まいについ

図表 主なロボット介護機器

**1 移乗介助用機器**  
要介護者がベッドから起きることやベッドから車いすに移動することを介助する機器で、体に装着することで、人を持ち上げる時の腰等への負担を軽減してくれる機器や介護を受ける人が自ら利用してそれらの移乗が楽にできるようにする機器。

移乗介助支援用ロボットスーツ  
自立支援型移乗介助ロボット

**2 移動支援用機器**  
外出や屋内移動、立ち座りをサポートし、荷物を安全に運搬できるようになっている歩行支援機器。

歩行アシストカート

**3 見守り用機器**  
転倒検知センサーや外部通信機器などを利用して、離れていても状況を見守ることができる機器。

**4 コミュニケーションロボット**  
人間の呼びかけや動きを学習し、反応しておしゃべりをしたり、動いたりする動物型や人型のロボット。

メンタルコミットロボット  
会話のできる癒し系コミュニケーションロボット

資料：公益財団法人テクノエイド協会 ホームページ  
厚生労働省「福祉用具・介護ロボット実用化支援2014」(平成27年3月)

ては、「現在の住宅に住み続けたい」人が72.0%で、単身世帯でも過半数(60.8%)を占めた。介護が必要になった時の高齢期の住まいでも、「現在の住宅に住み続けたい」と答えた人がほぼ半数の49.5%で、単身世帯でも38.2%だった。一方、「(特別養護老人ホーム等の)介護保険で入所できる施設に入所したい」とした人は13.1%(単身世帯では17.3%)となった。高齢者に必要な施策や支援については、「特別養護老人ホームなどの施設の充実」が最も高く52.6%となっている。

#### 理想の就業年齢は3人に一人が「70歳頃まで」

なお、調査が何歳頃まで働ける社会が理想であるかを聞いたところ、「70歳頃まで」が35.1%、「75歳頃まで」が20.4%、「80歳頃まで」が7.9%、「80歳以上で働けるまで」が11.3%となった。一方、「60歳頃まで」と「65歳頃まで」を合わせた割合は17.8%となっている。(調査部)